

稲作農家の最大行事（今は機械化でそうではありませんが）田植えが終了し、田んぼは鏡のように美しく、そこにかえるの合唱が毎晩趣を添える時期となりました。

大地の田植えも、幼児から大人までそれぞれの最高最大のパフォーマンスを発揮して、手応えある田植えが出来ました。昨日、全員で田んぼへ散歩に出かけ、春風に小さな苗の先をかわいらしく揺らし、しっかりと土に立っている苗を見てきました。嬉しい瞬間でした。田植えでいただいたジャガイモとワラビと身欠きニシン。ワラビは子ども達が収穫したもの。タラの芽、ワラビ、ふき、ヨモギ、たけのこ、アスパラなど、上に向かってぐんぐん伸びる山菜。伸びるエネルギーの塊です。たけのこと言えば、根曲がり竹が有名ですが、青ちゃんのタケノコは、大地の近くに生えるハチクというタケノコです。鯖の水煮と卵、味噌で食べるタケノコ汁は、まさに絶品！！先日、これになめこが入った物をいただきましたが、これもちょっと上品な味わいで絶品でした。今度一雨降った後は、子ども達と、タケノコ汁を味わいます。あなけんにもあるように、この時期の物を食べれば、健康で風邪をひかないで1年を乗り切れるとありますように、そのエネルギーをたっぷり味わっていきたいと思いますね。そんな季節をたっぷり味わいましょう。

大地の裏側の開墾した土地に、連日たくさんの野菜が芽を出してきています。ノンタン母さん、アカデミー、そして孤軍奮闘楽しむ篠原さん、大地の子ども達の畑が賑わってきて、大きなエネルギーを感じさせてくれるエリアです。毎日、たくさんの愛情溢れる足音を聞きながら育っています。これからの成長が楽しみです。

【生活の輪郭線】

玉村豊男著「田舎暮らしができる人 できない人」参考

長男夫婦が野沢温泉に引っ越して一ヶ月。ようやく、畑の整備、種まきが終わったようです。畑と言っても、茶色ではなく、緑色であり、つまり、雑草と共存している自然農だからです。同時に、建物、部屋なども丁寧にきれいになっていき、漆喰や和紙、竹などで壁や天井なども、自然なセンスで作られ、先日、ようやく、2口竈や桶シンクなどが備えられました。今回のテーマ、まさに 生活の輪郭線の収縮、手ざわりのある暮らしです。

話はそれますが、長女の野乃花が、インドスリランカから無事帰国したのと同時に、彼女の人生を変えた岡山わらの家（重ね煮の創始者）の船越さんご一家が大地を訪れました。19歳でわらの家に出会ったきっかけは、大地の保護者が、「わらのごはん」という本を見せてくれたことです。当時、高校卒業してソロモンへ渡り（これも、大地スタッフにソロモン諸島出身の子がいました）、帰国してこれからどうしようと考えていた時、その本に出会い、わらの家の研修生募集を見つけたのです。（見つけたのは青ちゃんです）。よって、彼女の人生のキューピットは、大地の保護者です。同じく、雄飛夫婦の出会いも、大地の保護者によるものでした。雄飛の世界を感じよう というイベントに、由佳ちゃんを誘って下さったのが大地の保護者。まさにキューピットです。大地の保護者に感謝。そしてこれからも！！

さて、話は戻り、生活の輪郭線とは、自分たちの暮らしを支えるエリアの事です。かつては、自分たちの暮らしを支える人々の姿が見えていた時代、つまり、着る物、飲む物、食べる物、家など。普段着は、裁縫などで作り、水は井戸からくみ、野菜類は畑から収穫、家の修理は父親の仕事で、家の建築は近所の大工さん……。つまり、ほとんど、顔の見える実感を味わい、それが安心安全に繋がっていました。更に前なら、糸を紡いで着物を作ったり、自分の森から木を伐りだして家を作ったりして、まさに毎日の生活に、はっきりした手触りを感じていました。

ところが、いつの間にか、どんどんその生活の輪郭線が拡大して、一体どこまでが自分の世界、暮らしに関する範囲なのかどうか、その境目がわからなくなってきました。衣類も、ベトナム製とかタイ、中国製。食物も輸入物、家も、大手ハウスメーカーなど。便利さ、廉価さ、などを追求してきた結果、逆に現代では、得体の知れない不安を感じるようになり、原産地呼称管理や不当表示の取り締まりなどが生まれてきたのも、多くの人たちが、生活の輪郭線の拡大に大きな不安を感じてきているからでしょう。

長男夫婦の暮らしを見ていると、まさにその輪郭線がはっきりしており、毎日手ざわりのある暮らしを楽しんでいます。自分達の目の見える範囲で、物をできるだけ調達し、結果的に、それらが安心安全に繋がり、更に、たくさんの人との支え合い、つながりに発展していっています。引っ越して一ヶ月足らずですが、近所の多くの方々と、毎日暖かいつながり支え合いがたくさん濃くあるようです。

まさにスローライフ。スローライフとは「ゆっくりスローに暮らす事」ではありません。参考までに、スローフードとは、ファーストフードの反対語としての造語。ジャンクフードは食べないで、料理や食べ物は出来るだけ手作りして、郷土に伝わる野菜品種や特産品や伝統調理法を守り、みんなゆっくり食卓を囲みましょう。つまり、手間と時間をかけて毎日の食事を楽しみましょう と言うことらしいです。それと同じように、スローライフとは 暮らしに手間をかけるライススタイルです。何でも買って済ませたり、人に頼んでやってもらうのではなく、生活に必要なことを出来るだけ自分たちの手でこなし、すぐに結果を求めるのではなく、その結果に至る過程を楽しむこと。例え、能率が悪くても、暮らしを他人任せにしない、仕上がりが無骨でも、手作りの面白さを好む。青ちゃんに言わせれば、自分で作ったり日曜大工をやっている人は、傍から見れば時間に余裕があり暇そうに見えますが、実は結構忙しいです。（本人は楽しんでるので、忙しいとは実感していませんが）その分だけ他のことをやる時間が削られますが、それよりも、人に頼んだり買ったりするファーストライフのほうが、よほど時間に余裕があるのんびりした暮らしです。

ここで、余談ですが。さらにここに優秀なトレーダーが出現すると。スキルがアップして大工仕事建築工事の腕を上げると……。他人の仕事を請け負うと日給2万円になるので働きに出る。そうすると自分の家の仕事が手薄になっていく。そこで、自分の家のメンテナンスをしてくれる業者を探す。それが日給15000円。大成功！！5000円の利ざや。全てがマーケティング化していき、暮らしの質が下がり、お金お金となり、心がすさんでいく……。

スローライフには、もちろん暮らしの安心安全、生活の手ざわり感の実感という素晴らしい味わいのみならず、人間としての心の充足感、豊かさ、温かさがあるような気がします。

同じように、最近はやりの「ロハス」と言う言葉はどうでしょう。青ちゃんにはいまだ謎です。この玉村さんの著作の中にはとてもわかりやすく書いてありますのでご参照下さい。参考までに「ロハスという言葉には都会的な匂いがします。田舎に移住してジャガイモの畑を作るというより、マンションのベランダでバジリコを栽培するイメージです」（玉村談）

更に 玉村談。田舎暮らしスローライフに向いている人の条件。①一人遊びの出来る人 ②モーツァルトとかえるの合唱を楽しめる人 ③人が恋しくない人 らしいです。

生活の輪郭線。その境界が大きくなればなるほど、便利効率性が高くなり、お金・忙しいなどの得たいの知れないものに怯えていく暮らしがあるような気がします。その境界線を今こそ、しっかりと見ていきませんか。



